

ある感想

(東京) 島崎 総

村落社会研究会が出版して、村研通信の第一号がだされる際に、頼まれて感想をのせたことがある。そこで、私は、社会学以外に、農業経済学、法社会学、その他の社会学の分野が染ってつくられるこの学会に、私なりの期待をよせた。それから数年たった今日また感想をのせるようになったとき、私はその期待が私としては満たされたことを、私はず述べておきたいと思う。それは、村落の社会学の交流、いやそれ以上に、村落の社会学的研究が次第に形をととのえそうな方向にある、ということである。

第五回大会を省みると、勿論、いろいろ物足りない点が残ったであろう。しかし、社会学出身の私としては、社会学専攻のもの、村落研究が、経済学その他の分野との接触によって、新しい理論的基礎づけに向って動きつつあることを特に感じた。勿論そこには、発表にも質問にも、例えば「村落を資本主義体制のなかで把握する」という発言にみられるように、他の社会学では常識であることが、まだ十分こなされてないやや妙な表現をとって、新しい発見のように述べられることもあり、「国家権力」、「独占資本」という従来の社会学の村落研究では見落されていた問題が正當に位置づけられないままに、説明原理に使用されることもあった。しかし、それでもそのような問題がしばしば無視されて

きた多くの従来の研究を思うとき、他の分野からすれば驚くべきことかもしれないが、大きな発展といつてよいであろう。ここまできれば、もはや、村落の社会学的研究とか、経済学の研究という区別を強いて求めることは大して意味がなく、村落の社会学的研究、そしてその重点のおきどころの違いと考えたい。村落社会研究会がそのような研究の場となつてきていることに私は満たされたところの感ずるのである。

以上を前提として、経済学では常識的なことを、私も一言ついでに述べておきたいと思う。村落の構造分析が土地所有の性格から、近代の、特に戦後の村落においては、資本との關係においての土地所有の性格から始められねばならないことは、さす異論ないであろう。資本と土地所有との關係をめぐって、戦後の農業・農村の構造に対して、一方で「国家独占資本主義的把握観点」と他方「共同体的把握観点」とが行われたことも周知の通りである。しかし、いずれかの観点のみが、現実の農村をよく把握しようということはないであろう。農村の階層・階級構造そのものの分析のなかから、国家独占資本主義的把握がより現実的であり、あるいは共同体的把握がより強調されねばならない、ということはある。国家独占資本・階層・階級構造・共同体的把握の發存、このシー・ヤはどのような村落をみるうえにも基本的な視点である。国家独占資本主義的把握がより現実的である階級分解のすすんだ村落と、共同体的把握観点の強調される階層分化にとどまっている村

落とのあいだには、無限にニュアンスを異にした村落がある、というよりも、現実の村落が、両性格をあわせもち、国家独占資本によって共同体的性格を停滞的に維持させられるということ、そこに日本の資本主義と農村問題の性格があり、資本主義の現段階的意義がある、と考えられる。しかし、いずれかへの傾斜は実際にみられるし、そこに発展段階に印した敷型を設定することも可能のような気がする、その場合、それを決定するものは、その村落における生産力段階、特に商業的農業の展開、いかにあるう。戦前から現在まで含めて、地主的土地所有と商業的農業の展開との對抗關係こそ、いずれかの村落構造をうみだしてくるものだと思う。

こんなような漠然としたことを、そして恐らく他の人には当り前にすぎないことを、昨年の村研の大会を省みながら、現在やっている「相模川河水統制事業と畑地灌漑」の調査整理を前にして考えている。最近の傾向として、社会学での村落の研究が、農政の移遷とか農村の都市化とかいう目新しい問題に関心がむけられているのを思うとき、私なりに考えた基本的な考え方の図式と關聯して、農政とか都市化とかいう問題がそこでいかに位置づけられているのかが一寸気がかりになる。多くの勉強しなければならぬことを目の前にして、今後も村研がその勉強を進めてゆく場にあつてくれれば、と私は思っている。